

経常収支比率の推移

○経常一般財源等（臨時財政対策債含む）

（単位：千円、％）

区 分	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較	
	決 算 額	決 算 額	決 算 額	決 算 額	決 算 額	増減額	増減率
地方税	10,351,846	10,404,866	10,628,009	10,735,818	10,911,660	175,842	1.6
地方譲与税	201,926	201,760	202,307	204,025	210,868	6,843	3.4
利子割交付金	21,413	12,180	19,047	18,695	9,994	△ 8,701	△ 46.5
配当割交付金	78,417	53,411	73,231	61,347	69,673	8,326	13.6
株式等譲渡所得割交付金	82,311	39,421	85,608	56,480	45,916	△ 10,564	△ 18.7
地方消費税交付金	1,382,073	1,269,819	1,351,753	1,483,144	1,442,500	△ 40,644	△ 2.7
ゴルフ場利用税交付金	10,433	10,423	9,724	8,231	11,195	2,964	36.0
自動車取得税交付金	53,783	54,034	80,769	73,741	43,706	△ 30,035	△ 40.7
自動車税環境性能割交付金	-	-	-	-	12,771	12,771	皆増
地方特例交付金等	79,568	80,823	89,523	106,772	254,376	147,604	138.2
普通交付税	2,356,200	2,143,796	2,229,303	2,249,465	2,341,327	91,862	4.1
交通安全対策特別交付金	10,446	10,457	10,280	10,228	10,302	74	0.7
使用料・手数料	100,432	124,585	125,421	103,532	105,087	1,555	1.5
諸収入	1,327	4,493	7,214	6,588	7,647	1,059	16.1
臨時財政対策債	1,242,400	1,044,000	1,212,500	1,251,900	1,098,700	△ 153,200	△ 12.2
合 計	15,972,575	15,454,068	16,124,689	16,369,966	16,575,722	205,756	1.3

○経常経費充当一般財源等

（単位：千円、％）

区 分	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	前年度比較	
	決 算 額	決 算 額	決 算 額	決 算 額	決 算 額	増減額	増減率
人件費	4,643,537	4,654,071	4,621,700	4,595,254	4,449,915	△ 145,339	△ 3.2
物件費	3,142,130	3,241,011	3,241,118	3,239,146	3,330,242	91,096	2.8
維持補修費	359,574	444,233	434,815	456,033	445,086	△ 10,947	△ 2.4
扶助費	2,079,698	2,114,514	2,258,242	2,306,873	2,412,106	105,233	4.6
補助費等	729,543	722,143	885,053	898,375	954,393	56,018	6.2
公債費	2,165,825	2,250,044	2,320,787	2,332,331	2,228,238	△ 104,093	△ 4.5
投資及び出資金・貸付金	0	0	98,012	69,336	55,335	△ 14,001	△ 20.2
繰出金	1,896,589	1,977,805	1,843,831	1,881,816	1,953,815	71,999	3.8
合 計	15,016,896	15,403,821	15,703,558	15,779,164	15,829,130	49,966	0.3

○経常収支比率

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
経常収支比率	94.0%	99.7%	97.4%	96.4%	95.5%
県平均	88.5%	90.9%	91.0%	92.1%	—
県内順位	50位	54位	53位	50位	—

経常収支比率 = (経常経費充当一般財源等)

÷ (経常一般財源等 + 減収補てん債特例分 + 臨時財政対策債) × 100

義務的経費（人件費・扶助費・公債費の計）などの経常的な経費に対して、地方税・地方交付税等の経常的な一般財源収入がどの程度充当されているかを表す指標です。この比率が低いほど経常一般財源の残余が大きく、臨時の財政需要に対して余裕を持つことになり、財政構造が弾力的であると考えられ、比率が高いほど、財政構造の弾力性が失われつつあると考えられています。

